TOKKATSUの共同授業研究による日本人学校と現地校の協力体制の構築の試みと検討

－カイロ日本人学校とエジプト日本学校における学級活動(1)および(2)の実践的研究からの報告－

○天野幸輔（名古屋学院大学）
○鈴木純一郎（多摩市立貝取小学校）
山田真紀（椙山女学園大学）
平田幸男（至学館大学）

本研究の目的

カイロ日本人学校（CJS）とエジプト日本学校（EJS）との間で，小学校教師の交流会を実施する。TOKKATSUに対する理解を深めるとともに，合同の学校行事（学芸会や運動会）や保護者交流の可能性について議論する。一連のプロセスから，日本型教育の発展に向けた日本人学校と現地校との協力体制をモデル化する。

本実践研究の背景と位置づけ

事業名：「非認知能力の育成に向けた特別活動の国際化と質保証に関する研究～日本型教育先進地エジプトにおけるTokkatsuの効果検証～」

- ４つのプロジェクトの一つ（Dチーム）の位置づけ
- プロジェクトA：Tokkatsuディプロマの共同開発，プロジェクトB：小学校における非認知能力育成の効果検証，プロジェクトC：特別活動の現地化に関するインタビュー調査
- プロジェクトD：カイロ日本人学校とエジプト日本学校との交流活動
- 2023年12月23日（土）～31日（月）にエジプト（カイロ）にて現地調査を実施

プロジェクトD（通称Dチーム）の目的

①カイロ日本人学校（CJS）とエジプト日本学校（EJS）との間で、小学校教師の交流会を実施する。

→Tokkatsu（学級活動⑵）の公開授業および意見交換会：令和5年9月18日，学級活動⑴の模擬学級会を含む交流活動：令和5年12月28日

②Tokkatsuに対する理解を深めるとともに、合同の学校行事（学芸会や運動会）や保護者交流の可能性について議論する。

→可能性を検討中

③一連のプロセスから、日本型教育の発展に向けた日本人学校と現地校との協力体制をモデル化する。

→①と②の進行状況から検討を進める

特別活動が、EJS教員とCJS教員の共同授業研究や研修を可能にした(1)

現地校と日本人学校の新しい交流のモデル化を切り拓く上で、特別活動ゆえの利点とは？

- 「領域」であり、担任教師、教科担任教師、経験年数など関係なく、全職員で取り組む必要がある点。
  →全校体制が整えやすい（地域性に関する学びの場にもなる）。学級経営上の問題の共有の機会提供。学年の協力体制の構築（比較的規模の大きな日本人学校）。

- 行事や委員会活動、生徒会活動などに関しては、国内であっても、その年ごとに学校が抱える問題が異なり、「昨年度と同様」が通用しない部分が存在する。それゆえに「その年ごとに創造していく部分が不可欠」である点を、日本人教師が、身をもって理解している。
  →派遣国の政情、国内問題の影響、また日本の国政から直接影響を受ける点で、そもそもが変更を余儀なくされることが多いので、学級経営などは保守的になりがち。変化を求めない職員も一定数存在する。

特別活動が、EJS教員とCJS教員の共同授業研究や研修を可能にした(2)

- これまでの「現地校の見学を代表例とする教員の交流活動」は現地理解、現地の教育事情の視察にとどまる。
- より「教師ゆえの、教師にしかできない交流活動」としての提案
- では「日本は教える側、エジプトは教えられる側」という関係性で終始してよいのだろうか？

→①「特別活動は日本の教育課程なのだから、こうあるべき」という姿勢では、文化の侵略になりかねない。どのように取り入れ、どのようなものに創り上げていくか、はあくまでエジプト側が決めていくべきこと　②日本型の負の側面にも留意し、エジプトからの逆輸入としてとらえるなかで、日本が学ぶべきことも見えてくるのではないか

→これらの点をよく理解して、日本人学校と現地校でのよりよい交流活動のモデル化を図る必要がある

「共同授業研究」とは？
「共同授業研究の成立要件」とは？

「文化的帝国主義」「文化の侵略」にならないために

日本人学校教師と現地校教師が共に研究授業等を行えば、即それをもって「共同授業研究」と言えるのだろうか？

１　日本人学校教師と現地校教師の対等な関係

特別活動を知っている者と教えてもらう者、などといった前提があっては、研究授業で問題点を率直に語ることができなくなってしまう可能性がある。逆もまた然り、「海外で」となると卑屈になっている面はないだろうか。

２　「日本の教育課程の意義を理解する場」を与えられているという観点

日本で誕生した教育課程ゆえに、当たり前になってしまい、その価値に気付かなくなっている面がある。全く違う文化・価値観の教師・学校で実践されることでしか気づけない部分がある。「日本人である私」との出会いにある可能性も。

３　帰国後の実践や教員キャリアの問題点・方向性をつかむ機会

モデル化につきものである「画餅」を脱する主体的な参加・活動あってこそ。授業研究の意義や楽しさを国内ではなく、日本人学校で知ることにも。まさにキャリア発達の場。技術面もさることながら、精神面を低く見すぎるのも残念。熱心な現地校教師の姿。

Q：特活はこうでなくてはならない、っていうのを日本が押し付けてしまうと、文化の侵略になっちゃうと思うんですけど、その点はどうお考えですか。

CJSとEJSの先生方との模擬授業と決まったレクリエーションの実践の後に、CJSの先生2名に立ち話で聞いてみました。

A先生：シニア派遣、経験35年以上

B先生：経験10年未満

Q：特活はこうでなくてはならない、っていうのを日本が押し付けてしまうと、文化の侵略になっちゃうと思うんですけど、その点はどうお考えですか。

A先生：シニア派遣、経験35年以上

ほんとにそう思います。なのでこの土地に合ったことに変化させながら、子どもたちの教育に役立ててもらえればな、一つのきっかけになればいいなと。でも子どもを自立させたり、お互い意見を尊重したりという、一番もとの話し合い活動を通して、エジプトに合った、特にエジプトの、例えば、EJSにはハイソサイエティの人たちがいるじゃないかと思うんですね。それが、庶民というか、もしかしたら70人からいる学校もあるというので、そういうところに少しづつ広がって、その国の風土に合ったものに、少しづつ工夫しながら置き換えてもらえたらいいのかなって思います。

→特活がエジプトの子どもにとって意義あるものにエジプト人の手で変化させていくとよいという提案

B先生：経験10年未満

もちろん、それはここのエジプトで暮らしている方の気持ちを尊重してやっていった方がいいと思うので、お互いの文化、今日の模擬授業でもそうでしたけど、お互いを尊重して、お互いのことを認めて、認め合ってわかり合ってやっていくことが大事だなと思います。

→研修における教師間の関係性についての語り

Q：日本人学校の側が、エジプトの先生方から学べることっていうのは、どんなことがありそうですか。

A先生：シニア派遣、経験35年以上（実は派遣２回目）

今回の自分たちの変化とか、エジプトの子どもたちの変化、そういうのを聞かせてもらって、さらに特活の基礎のところ、ちょっと日本では少しづつ変化してるところなんですが、CJSで基本に戻ってというか、そういう形で、特活の意義を伝えながら、活動につなげられたらなと思うんですけどね。

→海外に伝える際に、その特質や技術について基礎基本に立ち戻る機会ととらえている（グループインタビューを通じて考えた部分も含まれる）

交流のモデル化による「帰国後の現実」の打破：
派遣者自身も現実を創り上げている側面はないでしょうか？

- 自治体、教育事務所ごとに、実態は異なる
- 帰国後、「遊んできたと言われるのがオチなので、聞かれても積極的には返答していない」「海外へ派遣されたということを、封印して学校で生きている」「他の派遣者に対するうわさ話で、あいつ日本人学校だって！ヤッター！というのを聞いて、何だか怖くなって、何も話していない」「全くやったことのない、日本語教室関連の分掌ばかり務めるようになってしまった」などという声を聞くことがある。
- 積極的な先生方による「派遣国を知る地域の代表として見聞や現地校の視察内容を広める役割」以外の提案はあり得ないでしょうか？
- 派遣国の事情も刻々と変化するので、経験はすぐに古くなってしまう。派遣国につながり続ける役割はないだろうか？派遣国での実践研究から、日本全体の教育実践を問うような役割はないだろうか？

帰国教員の現場での新しい関係性の例(1)
ー「派遣国での実践パートナー」から、「派遣国での成果を生かして日本の教育実践をより高める共同実践者」という新しい帰国教師像の提案 ー

- 派遣国エジプトのカイロ日本人学校で、エジプト日本学校との授業研究会で公開授業を行ったH氏は、令和6年3月帰国後に岐阜県公立小学校教諭（4年生担任・学年主任、研究主任）
- 初のスーパーバイザーとしてエジプトへ派遣（令和2年～令和5年）された鈴木純一郎氏（共同演者）は、令和5年3月帰国後に東京都多摩市立貝取小学校校長
- エジプトで実際にTokkatsuの普及に共同で務められた。
- 帰国後にはDチームメンバーとして、日本人学校と現地校（ここではエジプト日本学校）の授業（日本の教育課程）を通じた交流のモデル化で、再度協力、協働

帰国教員の現場での新しい関係性の例(2)
ー同じ日本人学校への派遣経験による情報共有と信頼をベースにした帰国者と再派遣者の協働ー

- 前述のA先生と本発表演者の天野は、同じ日本人学校派遣経験あり。互いに日本人学校より、双方の情報を得て、模擬授業による研修に臨むことになった（情報以上に共通する過酷な場での指導経験）。こうした例は、他にも存在する可能性がある。

・これまでは、日本人学校派遣者は誰も行ったことのない外国へ数年住んだ経験のある先生、として文化の大使のような位置づけではなかったか。
・変化が激しい現在では、体験はすぐに古くなります。帰国後に「コンテンポラリーな事件に関するコメントを求められて困った」とい感想を聞きます。
・今や児童生徒の方が、国外旅行・居住体験が豊富です。

- 派遣国で、「現地校の教師とともによりよい授業づくりで協働する」交流モデルの魅力
- 「日本の教師であること」を視察から感じるにとどまらない、教育技術の比較、その背景にある教育理念への気づきは、研究授業を含む協働あってこそではないでしょうか。
- 帰国後に「教師としてどのような力をつけていたいか」「活躍の場として、派遣者間のどのような協働がありうるか」の青写真づくりとして、交流モデルは意義を発揮する。

謝辞：本研究は、令和5年度 文部科学省「日本型教育の海外展開（EDU-PORTニッポン）」調査研究「非認知能力の育成に向けた特別活動の国際化と質保証に関する研究」の助成を受けた。

謝辞：本研究は、日本特別活動学会2023年度重点課題プロジェクト「グローバル・スタンダードとしての日本型教育モデルの開発
―TOKKATSUの海外展開の分析―」の助成を受けた。